



Title	J. Conder がいけばなに何を「発見」したのか 「日本的フラワーアレンジメント」理論の一考察
Author(s)	ドウトカ, マウゴジャータ
Citation	間谷論集. 2026, 20, p. 93-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

J. Conder がいけばなに何を「発見」したのか

——「日本的フラワーアレンジメント」理論の一考察——

ドウトカ マウゴジャータ

〈キーワード〉 Conder 「日本的フラワーアレンジメント」 線の美

1. はじめに

周知の通り、イギリス出身お雇い外国人で建築家 Josiah Conder（ジョサイア・コンダー¹、1852-1920; 在日 1877-1920）は「近代日本建築家の父」と呼ばれるほど、明治期の建築教育への貢献と設計の実践など、職業的な活動の業績が大きい。また、欧米におけるいわゆる日本学の発展にも寄与した人物で、いけばなをはじめ、日本庭園や河鍋暁斎の日本画に関する著作も残している。それに匹敵して、コンダー研究は建築論や日本庭園論を中心に盛んに行われ、伝記も出版され、そして著書や作品を紹介する展覧会も開催されてきた²。この状況を見ると、コンダーは 21 世紀の現在でもなお話題にのぼる、数少ないお雇い外国人の一人であるといえる。

しかし、いけばな史研究に限ってみると、コンダーによる海外向けのいけばな紹介は幾度も言及されている³にもかかわらず、その理論の構造や意義は十分に明らかにされているとは言えない。

戦後のいけばな史研究では、来日外国人のいけばな観を研究する必要があると主張したのはイケバニスト工藤昌伸である。工藤はコンダーの著書を優れたいけばな紹介書として評価し、その「膨大でかつ詳細な」内容の概要を示した。その上、コンダーの意図は西欧の自然観への警鐘を鳴らし、西欧のフローラル・アートにインパクトを与えることにあったとしたが、その理論の構造や背景の分析に

は至らなかった⁴。

工藤の指摘以降、コンダーの海外へのいけばな紹介を取りあげる論者が増え、近年ではいけばなの線的なデザインに着目したコンダーの「線の美」発見の意義を主張する研究者が多い。例えば、吉川順子はコンダー理論は基本的な技法や用語、花器の種類、素材の組み合わせ、各季節や行事の花の説明に多数の実例も示した力作だが、そこで強調されたのは欧米のフラワーアレンジメントにはない、いけばなの「線の調和と美」だったとしている⁵。井上治も、コンダーは花道文化を客観的かつ学術的に考察し、日本の插花の特徴として「線條美」をあげ、「マッス（塊）」を重視する西洋のフラワーアレンジメントと対比させたと論じている⁶。

一方、小林善帆は新しい視点でコンダーの著作に注目し、男性の嗜みとしてのいけばなの捉え方を中心にジェンダー論的な解釈を試みているが、いけばな理論そのものは分析していない⁷。

また、外国人研究者はむしろ欧米におけるコンダーの著書の影響力や意義に目を向けてきた。例えば、Joseph LaPenta はコンダーがいけばなを新しい芸術として欧米に紹介しただけではなく、後世のいけばな紹介書に継承された描写のパターン（アート概念の説明、西洋のフラワーアレンジメントとの比較、風景、季節、儀礼の花、歴史などの記述）を作り上げたとしている⁸。

本稿では上記の状況を受け、コンダーの提示した「日本的フラワーアレンジメント」理論において何が「発見」され、いかに語られたのか改めて検討していきたい。考察の結果、コンダーによるいけばな著書の特徴が浮き彫りとなり、日本文化をめぐるもう一つの近代的な言説を垣間見ることができると思われる。

2. コンダーによる「日本研究」といけばな紹介書

1877年1月に来日したコンダーは1か月後に日本アジア協会（Asiatic Society of Japan；以下、ASJと表記）の会員となった。ASJは1872年に横浜で設立され、日本研究の推進を目的としていた。有力会員には外交官と宣教師が多く、この職種の外国人は職業的な理由から日本の歴史や地理などの調査を積極的に進め、そして知的な交流の場を求めている。ASJの例会において報告された研究成

果は新聞などに掲載され、在日外国人だけではなく、海外の人々にとっても日本に関する重要な情報源になったと思われる。

入会後のコンダーは凡そ3年間日本建築に関する調査を進め、その結果をイギリスの建築雑誌に発表していた。一方、ASJでは自らの職業と関係なく、日本の服装史（1880-81年、2回発表）や日本庭園（1886年）について報告し、その内容はASJの紀要 *Transactions of the Asiatic Society of Japan*（以下、TASJと表記）にも論文として載せられた。

日本庭園を取り上げた論稿をみると、コンダーはすでに西洋と日本の間にみられるフラワーアレンジメントの差異を以下のように認識していたことが分かる。

With us the general idea is to produce a bouquet in which the richest variety of colour can be obtained - a sort of crush concert of hues in which individual form and beauty are almost lost. The Japanese florist on the other hand prefers to display the natural lines of stems and branches, and to exhibit the subtle shapes and colours of each bud and blossom in an open and well balanced composition.⁹

ここからまず読み取れるのはデザイン要素の「マッス」と「線」の対比である。西洋のブーケといけばなが比較され、前者は植物の個性的な形を無視して、様々な色を豪華に組み合わせるだけのもので、後者は枝の自然な形を活かし、オープンで均整の取れた作品となっているという。いけばなをみた欧米人はそれをブーケと比較し、洗練された芸術として評価していたと言われている¹⁰が、コンダーもその一人だった。しかし、そのレベルの認識に止まらず、いけばなの調査に踏み切った理由について、建築家の河合浩蔵（1856 - 1934）が次のように述べている（表記は原文のまま）。

「明治二十年に歸省勞欧米を巡視の際龍動にて久方振りで姉妹に面會されし時、生花の話が出て、婦人には誠に綺麗な能き技芸で有ると云つて熱心に述べられたそうである。然し如何にして此の技術を學ぼうかと云ふのに、英譯の著書は皆無であつた。そこで先生歸京後より此の著書を思ひ立たれ色々

生花の書物（流派等問はず）を澤山に集められ、斯道の師を招き研究せられた。」¹¹

この記述によれば、コンダーがいけばなの調査を決心したきっかけは1887年の一時帰国であったと推測できる。また、いけばなを英国の女性に相応しい「綺麗な能き技芸」と捉えていたこと、そして英文の紹介本がない状況に気づいたことも窺われる。さらに、日本に戻った後に特定の流派に限らず花書を集め、花道の師匠にも相談しながら調査に当たったようであるが、具体的な流派名や花書は今なお不明である¹²。

以上のような経過をたどり、コンダーは1889年3月にASJ会員を前にして“The Theory of Japanese Flower Arrangements”（「日本的フラワーアレンジメントの理論」；以下“Theory...”、あるいは「論文」と表記）という題で調査結果を発表した。その内容は同年TASJに論文として掲載、そして2年後改めて編集され、本として出版された。コンダーのこの著書は話題を呼び、何回か改版・再版されたが、筆者が現在把握している出版・再版を年度順に記すと以下ようになる。

- 1889 “The Theory of Japanese Flower Arrangements”, *TASJ* vol.17（再版：1906?; 1935 Kobe, London; 1936 New York; 2004 London; 2006 London; 2016 London; 2019 e-book）¹³
- 1891 *The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*, Tokyo（再版：1892 Tokyo, London; 2004 Tokyo; 2016 New York）
- 1896-1897 “Japanese Flower Arrangement” 1-3, *Studio*
- 1899 *The Floral Art of Japan: being a second and revised edition of the Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*, Tokyo

この再版状況からすると、1930年代以降は一般向けの言説というより、むしろ学術的で専門的な“Theory...”のほうが欧米において注目を集めてきたといえる。また、21世紀になって再版が多くなってきたが、それは19世紀の様々な英文著書を復刻する出版社が増えたことと、*The Floral Art of Japan* が日本語に翻訳

され、コンダーの業績に関する認識が日本国内外で高くなったためであろう。

以下ではまずコンダーの“Theory...”の特徴を把握し、そのいけばな理論の構造を考察し、なにが主な話題、つまり新たな「発見」となっているのか検討する。その上、一般向けの著書に焦点をあて、「日本的フラワーアレンジメント」理論の更なる展開を究明していく。

3. 「日本的フラワーアレンジメント」理論の構造と特徴

1889年に *TASJ* 第17巻に掲載されたコンダーの論文には章立てがなく、見出しのみが付いているが、その内容を記載順のテーマ別（分類は筆者による）にまとめ、さらに記述の分量（ページ数）をまとめて明記すると、表1のようになる。

表1 “The Theory of Japanese Flower Arrangements” の構造

テーマ	頁	頁数	テーマ	頁	頁数
導入	1-2	1.5	花暦	34-47	14
線の重要性	2-4	1.5	行事や儀礼の花	47-64	16
起源と歴史	4-7	3	室内における位置	64-68	4.5
遠州流の由来	7-9	1.5	花の礼儀作法	68-71	3
線の構成	9-15	7	技術	71-72	2
花器とその使用	15-28	12.5	伝統的な花材の特徴	73-87	14
花材の取り合わせ	28-30	3	花材の養い方	87-89	2
「性別」の原理	30-33	3	作例と解説	89-96	8

表が示す通り、最も比重の大きい内容は行事や儀礼の花、花暦、伝統的な花材の扱い方である。この3つのテーマに総頁数の約40%が充てられていることから、コンダー理論では中核をなす内容だと思われる。そして、この内容に共通しているのは、いわゆる季節感と生活文化のなかでの植物の時間的・空間的扱い方の意味への着目であるといえる。他方、「線の美」に関する解説はテキストの冒頭、歴史の解説を挟んで二か所で展開されていることから、コンダーはやはりいけばなのデザインに特に注目していたといえる。以下では線のデザインに関する

記述を検討した後、花暦や花器の描写など、要点と思われる内容の分析を試みる。

コンダーはいけばなの「線の美」、あるいは「曲線美」を「発見」し、欧米に紹介したとされているが、その「発見」がどのように行われたのかは以下の主張に見ることができる。

The balance and beauty of lines in combination is *par excellence* the distinguishing feature of Japanese floral compositions and one which gives much scope for the display of skill and character in designing. Indeed, throughout the refined arts, as expressed by the Japanese, this predominant importance of line is everywhere observed.¹⁴

すなわち、いけばなにみられる線の美と均整はその分野特有のものというより、日本の美術に共通して現われているとコンダーはみていた。しかし、これもコンダー一人の見解ではない。日本の造形芸術にみられる線の美と役割は植物学者でデザイナーの先駆者 Christopher Dresser（クリストファー・ドレッサー、1834-1904）や美術評論家 James Jarvis（ジェイムス・ジャーヴェス、1818-1888）など、欧米の芸術理論家や評論家にも論じられ、当時はむしろ通説であったと思われる¹⁵。よって、コンダーがいけばなのデザインに着目し、線の美に気づいたことは当然の結果である。

しかし、西洋において線の美に対する共通認識があったとすれば、その基盤にあったものを問うべきである。そこで、コンダーの論述に使った語句が示唆的だと思われる（下線は著者による）。

...the people of this country (Japan) possess a very keen perception for the lines of beauty and harmony which underlie many natural forms.¹⁶

ここで言及された「美の線に対する認識」の「美の線」(line of beauty) は実は William Hogarth（ウィリアム・ホガース、1697-1764）が 1753 年出版の著書 *The*

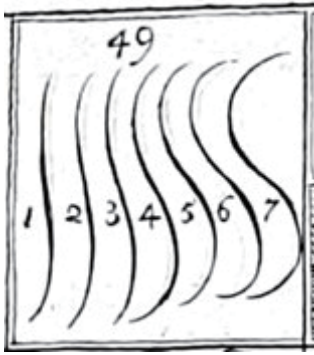


図1 Hogarth *Analysis of Beauty*
Plate I (部分)

*Analysis of Beauty*¹⁷ において提示した美学論のキーワードの一つである。ホガースは二次元的な曲線 *line of beauty* (図1 参照) と三次元的な曲線 *line of grace* (優美の線) が美を生み出すと見て、それが人間の身体の美や動き、特に踊りの優雅さの根底にも存在するとした。その用語と説はイギリスやヨーロッパの絵画論に強い影響を与えたほか、John Ruskin (ジョン・ラスキン、1819-1900) など、ヴィクトリア時代の著名な美術評論家や思想家にも論じられた。また、建築理論家

Edward L. Garbett (エドワード・L・ガーベット、?-1900) の著した大学生向けテキスト¹⁸ にも使用され、コンダーは学生時代にその思想に接した可能性が高い。なお、コンダーは上記の *line of beauty* 以外にもホガースの理論を連想させる語句、*graceful curves* (優美な曲線) や *variety* (多様性) を描写に使い、また日本舞踊の線的な動きの美はいけばなの線の美に共通しているとも述べた。

次に、いけばなの線的な構成がどのように描写されたかということ、3線、5線、7線からなるアレンジメントの解説を通してである。なかでも、コンダーは3線からなるアレンジメントはとりわけ *a favourite and very characteristic one* (とても特徴的で好まれているもの) であるとしたが、ここでは基本的な様式として捉えていない。主な線(枝)の呼称はすべて遠州流の呼び名を採用しつつ、他流派の用語も一部紹介した。例えば、3線の構成では各枝の名称を *Shin, Giō, Sō* (真・行・草) と記した上で、*Chichi, Haha, Onore* (父・母・己) と *Ten, Chi, Hito* (天・地・人) も記載した¹⁹。いけばなの構図は非対称的でありながら、全体として均整の取れたアレンジをなしているとして、その結果得られる *variety in harmony* (調和における多様性)²⁰ こそが日本的なデザインの原理であると力説した。

また、建築家コンダーの見解では、いけばなの線的な構造は *an almost architectural conventionality* (ほとんど建築的な常套) を示しており、その特徴は

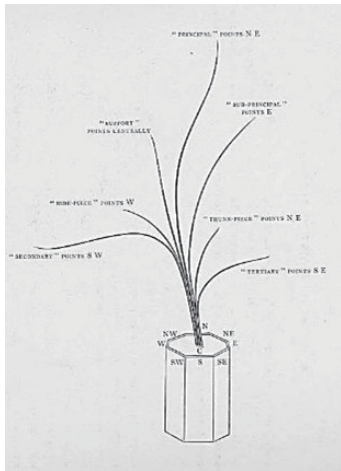


図2 Conder “The Theory...”
Plate 6

線の立体的な配置によって得られている。そこでとりわけ重要なのは the impression of a stable and vigorous origin (力強く安定した根本の印象) を醸し出す、花器の水面から伸びる線、そして定まった方向に配置され、立体の形を作っている線である。コンダーはその空間構成を視覚的に示すために八角形の花器を描いた図を使い(図2参照)、そこに八方の方向を明記して、読者の理解を促した。この挿絵は近世の花書『青山御流活花手引き種』巻1にある図の写しだと推定できる²¹。このように、コンダーは遠州流の教えを “Theory...” の中心に据えながらも、多流派の資料を使用

し、「日本的フラワーアレンジメント」に共通した原理を見出そうとしていた。なお、コンダーの立体性の「発見」、そしてそれを可視化する工夫は後のいけばな論者にも継承されたので、注目に値するといえる。一方、コンダーが参照したと思われる近世の花書にはいわゆる禁忌、つまり避けるべき線の使い方が提示されており、コンダーもそれに言及している。“Theory...” では Errors in lineal arrangement として6つの好ましくない線の配置をあげ、それを表象する挿絵も添付した。管見の限り、19世紀後半の欧米のフラワーアレンジメントにおいて禁忌に相当するルールがなかった。それだけに欧米の人々にとって新しい視点であり、かつ重要なデザインの情報だったといえる²²。

改めて “Theory...” の構造に注目すると、上記の通り、いけばなの線的デザインは重要ではあるが、重点はむしろ花材や花器の解説に置かれていたと思われる。

花材から見ていくと、コンダーはいけばなの材料となる植物と季節の關係に着目し、470種以上の植物名(日本語・ラテン語・英語)を旧暦月別にまとめたリストという形で論文に盛り込んでいる。リストの編集に際してコンダーは植物学者矢田部良吉(1851-1899)の協力を得たようである²³。また、コンダーは行事

や儀礼の花について事細かく述べ、そこで表象される季節・自然と文化との関連を提示した。このように、植物学研究以外の著作において、欧米に向けて日本の花暦を充実した形で紹介する試みは注目に値する。

ただし、日本の花暦をはじめて取り上げたのはコンダーではなく、医師で博物学者の Phillip Franz von Siebold（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、1796-1866）である。その著作 *Nippon* では「花暦について」という一節があり、そこでは『茶席挿花集』をもとに 12 か月を特徴づけられる花が各月 3 種ずつ明記されている。この記述を基に、シーボルトは西洋の花暦を意識しつつ、日本の室内に飾られる花には異なる意味付けを感じとったという見解も示されている²⁴。

コンダーがシーボルトの紹介した花暦を認識していたかどうかは不明だが、19 世紀後半の欧米における装飾美術への志向、そしてデザインと植物（自然）をめぐる動向には精通していたはずである。例えば、ドレッサーが 1862 年に著した *The Art of Decorative Design* も知っていたと推測できる。自然、特に装飾における植物の役割を論じたドレッサーのこの著作には付録として「花の時計」、「各月の特徴的な花」や「各国の特徴的な植物」のリストも記載されていた。

花暦や花材に次いで、コンダーが大きく取り上げたのは様々な花器の種類と使い方である。アレンジメントの性格も、また花を生ける技術も使用される花器の形に関係していると指摘し、器の役割を注視した。その上、まず 5 種類の銅製の花瓶と 2 種類の花籠を描写し、その歴史的な意義や花器と花との均整などを論じた。さらに、42 種類の竹製で縦型の花器や船の形をした花器を列挙し、日本語名の意味、由来や使い方の解説を加えた。そして、様々な形の花器を 14 枚の挿絵で示し、自説を視覚に訴える手法で立証した。

周知の通り、日本の陶器は開国以前より輸出されており、日本美術や工芸品のコレクターの間で特に好まれる収集対象であった。そのため、ジャポニズムの流行とともに日本の陶器に関する研究が進み、英語の紹介本も出版されたが、そのなかに籠や竹製の器に関する記述はほとんど見当たらない。よって、日本家屋の構造や床の間の室内装飾を論じ、典型的な竹製の花器について触れた Edward S. Morse（エドワード・S・モース、1838-1925）の *Japanese Homes and Their Surroundings*²⁵ は先駆的な書籍だといえるが、体系的な紹介ではない。その意味

で、いけばなに日常的に使われていた50種以上の籠や竹製の花器はコンダーのもう一つの「発見」として見るができる。その「発見」によって欧米のコレクターやフロリストに新しい収集対象とフラワーアレンジメントへの応用の仕方が示され、物質的な交流も促されたと思われる²⁶。

また、“Theory…”全体の分量からして少ない紙面を割り当てられた論点をみると、住居における花の位置や礼儀作法、起源と「性別」の原理、そして技術と花の養い方に関する言及が挙げられる。つまり、社会的な空間での花、歴史と思想、アレンジの技術が論じられた箇所である。ここでは技術に関する内容を割愛し、コンダーが論述した花の社会的な意義と歴史・思想についてみていく。

コンダーは日本の住居空間における花の位置づけを語る際に、まず床の間の様子とそこに置かれる装飾品、そして花との関係を説明している。なかでも特に注目したのは、掛物の数と花の関係、掛物と花の位置の関係、掛物の主題と花の関係、そして花と部屋からみえる庭の関係である。また、違い棚の花についても説明している。それらの事柄はすべて室内装飾としての花が持つ象徴的な意味をあらわすものであり、コンダーはその解説において日常生活に密接に結びついた文化としてのいけばなのあり方を明らかにしたといえる。しかし、それを欧米の室内装飾と比較せず、またいけばなの応用も論じていないことから、コンダーはあくまでいけばなの「日本的な」あり方を伝えようとしたといえる。

いうまでもなく、室内装飾は社会的な関係、とりわけ今日でいう「おもてなし」にも関連がある。近世日本の花書をはじめ、節用集や重宝記といった指南書にも「花の見様」、つまり拝見の仕方が描かれており、礼儀作法の一つとして扱われていた²⁷。コンダーの論文にみられる、日本の家を客として訪れた際の振舞方、具体的には座り方、花の拝見の順番や褒め方の描写は日本の指南書の内容をそのまま伝えている。また、訪問先の主人に客が花を生けるように頼まれた時の作法や花をプレゼントする作法の解説もあり、日本で社交生活を営む上で外国人に必要な情報が盛り込まれたとみることができる。

一方、いけばなを芸術と見なすと、その歴史や思想の解明が欠かせないが、コンダーのいけばな史に関する解説は極めて断片的である。その情報源となった近世の花書はほとんど技術的な説明に終始しており、それをもとにいけばな史の全

体像を描くことは困難だったためだと思われる。その乏しい情報源を活用して、コンダーはいけばなの起源はインドから伝わった仏教にあると述べ、古代の創始者として聖徳太子と明恵上人を挙げた。その人物に纏わる謂れから原理を導き出し、五行と陰陽、そして *philosophical spirit* (哲学的な精神) を暗示する *the natural locality of production* (生育の自然環境) に触れた²⁸ が、その論点を展開させないまま、初期のアレンジメントの特徴や構図の描写に移った。そして、*the more modern art* (よりモダンなアート) であるスタイルは千利休によって導入されたとして、古流や遠州流など8流派の名称を挙げた。なかでも遠州流は最も洗練され、人気があるとして、主にその花論に基づいて理論をまとめた。

ちなみに、コンダーの発表後に ASJ で行われた議論の記録からすれば、討議はいけばなの由来という点に集中したようである。コンダーの良き友人でもあった Francis Brinkley (フランシス・ブリンクリー、1841-1912) は、発表の内容を高く評価しながらも、中国文化との関係、そして仏教との結びつきについて、特にほかの仏教国ではフラワーアレンジメントの芸術が発展しなかった理由について質問した。それに対し、コンダーは紹介した情報は日本の文献によるものであり、限定的だが、いくつかの要因が仏教的由来を示唆していると答えた²⁹。

また、論文で言及したいくつかの原則のうち、コンダーが最も重視したのは季節感および *sex* (性別) と解した陰陽説であったことに留意しなければならない。前者は花暦や花材の取り合わせをテーマとした文章など、随所にみられる。他方、後者については花材の取合わせを論じ、季節感の表現について論じた後に解説した。コンダーは「性別」の思想は日本庭園においても反映されているものであり、それは日本の *a common fancy* (一般的な想像・空想)³⁰、つまり芸術のジャンルを超えた原理だとしていたようである。また、そのような「空想」はデザインにおいて価値があり、ほどよく均整の取れたコントラストの調和を生み出すとして、いけばなにおける意義を主張した。そして、「性別」=陰陽説の由来や中国思想との関係には論文では触れていないことが注目に値する。

これまでコンダーがいけばなに見出した構造や原理について検討してきたが、次にそのような内容はどのような形で伝えられていたか、どのような語彙が使われ、いかに表現されたか、いくつかの点に限って探ってみたい。

まず、以下の“Theory...”の冒頭に注視したい。

The Art of arranging flowers has always been regarded in Japan as an elegant accomplishment...³¹

周知の通り、英語の art という語彙は様々な意味を有しているが、これを大文字で書くと、「純粹芸術」のニュアンスが強調されるので、コンダーはこの書き方を用いていけばなを疑いなく芸術として位置付けたといえる。また、この文章の続きとして、いけばなが男性の嗜みでもあり、それに携わることによって ten virtues (十徳)³² が得られると述べたが、この主張もまたいけばなを芸術と位置付けるための要素であった。というのも、19世紀の英国ではアートはほとんど男性の領域であり、また芸術と道徳の関係は著名なラスキンなど、男性の思想家によって論じられ、一般に共有された言説だったからである³³。

また、コンダーの日本語用語の使い方をみると、論文には500以上の日本語の単語を確認することができる。いけばな理論の発表は日本に在住して、日本の文化や歴史に関心を持ち、あるいは研究をしていた ASJ 会員を前にして行われたので、いけばなの専門用語の紹介はコンダーの行った調査の高いレベルを示すものであった。そこで使用された語彙は植物名や花器の呼び名が多いが、本稿の観点からして重要なのは花型関連のものと様式を意味するものである。花型の用語は構成要素の線(枝)の呼び方などだが、発表では主に遠州流の複数の用語を使い、それぞれの英語訳を付けている。また、花様式については shin no hana (真の花)、rikkwa (立花)、naga ire (抛入れ) という3つの用語をあげた。しかし、実際に理論の対象となっていた様式で、当時「いけばな」と呼ばれていた生花(現在の読みは「せいか」、「しょうか」)については解説しながらも、一度も ikebana という日本語の用語を使っていない。発表のタイトルでは Japanese flower arrangements として、本文では Japanese floral compositions、flower compositions、あるいは modern style という表現が用いられている。そのような様式の記述や用語の使い方は、コンダーが芸術として扱った「日本のフラワーアレンジメント」は全体として「いけばな」、あるいは「花道」という概念によってコンダー本人

に認識されていなかったことを示唆している。

4. コンダーの著書にみるいけばな理論の展開

“Theory...” 発表の2年後、1891年にコンダーの著作 *The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement* (以下、*Flowers of Japan...* と表記) が博文社より刊行された。その序文において、著者は ASJ で行った報告が日本とイギリスで好評を得たことから、その内容を a fuller and more attractive manner (より充実して魅力的な方法) で more popular shape (より一般的な形) に再編纂したと述べた³⁴。つまり、コンダーが著書の執筆に際して読者として想定していたのは ASJ 会員のような、日本研究に携わる在日外国人ではなく、日本国外の大衆であったといえる。その結果、論文とは異なる構造で、割愛箇所、修正箇所や補記の多い著作となった。本稿は紙幅の関係でその理論において重要な変更点のみ取り上げ、検討していく。

タイトルも示唆しているように、コンダーの著書は2部構成で、第1部は論文になかった「日本の花」をテーマとしたもの、第2部はフラワーアレンジメントに関する内容となっている。

まず、論文には解説されなかった第1部の内容に注目したい。そこでコンダーは珍しいものほど好まれている西洋的な花の趣味とは対照的に、日本の人々はどこにでもある自然やありふれた花に美を見出す芸術的な性格を有していると述べた。その上、日本では花は季節の移り変わりを告げるものとして、屋外の娯楽の不可欠な要素であるとし、春から秋まで愛でる対象の代表的な花とその名所、そしてそれにまつわる歴史的なエピソードや詩を紹介した。この内容はすでに欧米において定着していた「花好きな日本人」のイメージに訴え³⁵、より具体的な例や詩など文学との関係を示すことでその表象をさらに補強するものだったといえる。

次に、“Theory...” の内容を取り入れた *Flowers of Japan...* 第2部 *The Arrangements of Flowers* の章のタイトル (以下、原文のまま) と記述の分量をみると、表2の通りである。

表2 *Flowers of Japan ...* 第二部 The Arrangement of Flowers の構造

タイトル	頁	頁数	タイトル	頁	頁数
Introduction	21-22	3	Flower Vessels	55-83	29
Flowers according to their Months	25-37	13	Position of Flowers in Rooms	85-91	7
History and Theory	39-43	5	Ceremonial and Etiquette	95-108	14
Lineal Distribution	45-50	6	Practical Examples	109-136	28
Selection of Material	51-53	3			

概していえば、著書の内容は論文に比べて再編集されているものの、論理的な流れや分量の割合はとても似通っている。第1部に関連がある花暦は冒頭に位置づけられ、その後に歴史と理論が続いている。また、紙幅でいうと、作例を別とすればやはり花器の説明が最も長く、その次に重要な位置を占めているのは花暦や行事・礼法である。それぞれの項目の内容は基本的に論文に依拠しているが、論文において強調されたいくつかの点は再編集のため割愛されたり、加筆されたりしたことも注目に値する。例えば、論文では冒頭に述べられた、男性の嗜みとしてのいけばなと「十徳」に関する説明は短縮され、第2部の「歴史と理論」に盛り込まれた。また、日本語用語の一部は翻訳して記載したが、このような内容変更は一般読者に対する配慮を窺わせている。以下では変更箇所の具体的な例を挙げておく。

いけばな理論の展開という観点からしてとりわけ重要な変更・加筆箇所は History and Theory、Lineal Distribution、Position of Flowers in Rooms の章に見いだせる。まず、いけばなの由来を解説する際にコンダーは以前と同じく仏教との関係を指摘したが、仏教は中国を通して日本に伝来し、花を生ける技術も中国の僧侶が伝授したという見方を提示した³⁶。すなわち、著作では「インド由來說」から「中国伝授説」へと比重が移されたといえることができる。その展開も、発表後の議論および中国と日本に対する読者の認識を考慮に入れた結果であろう。

また、同章においてフラワーアレンジメントの原理を説明して、花材の取合わせにみる縁起担ぎの原則、五行、色の位置づけ、そして陰陽の思想を取り上げて

いるが、ここでもやはり「性別」（陰陽説）の重要性を主張し、以下のように解説を加筆している。

...the male and female principles of Chinese philosophy are constantly applied to distinguish contrasting forms, surfaces, or colours in composition. (...) Curious as such fancies may seem, they are of considerable value when applied to the art of design, their observance helping to produce that harmony of well balanced contrasts which should pervade all compositions. Nor are such ideas, indeed, quite foreign to Western art, in which, for example, it is common to attribute male and female characteristics to the different orders of architecture.³⁷

上記の通り、論文ではこの「性別」の原理が中国思想との関連で位置付けられていなかったの、著作においていけばなに対する中国文化の影響がいつそう強調されたといえる。上述の、「日本的フラワーアレンジメント」の由來說と同様、この展開も ASJ での発表後の議論を受けてのものだと思われる。ただし、この「性別」の思想は西洋の文化、とりわけ建築にも見出せるというコメントについては、コンダーは東西文化、あるいはアジア文化の優劣を裏付ける特徴ではなく、むしろ三者ともに共通した文化的要素を見出そうとしたといえる。

さらに、コンダーのいけばな理論において最も高く評価された線的構成に関する解説にも重要な変更点がある。例えば、3つの役枝からなるアレンジメントに関する描写ではその構図は直角三角形に収まっているという説明と2点の挿絵（縦型、横型）が添付された箇所である（図3参照）。挿絵は1851年頃刊行されたいけばな手引書『生花早満奈飛』³⁸二編の「生花天地人三才の図」を模



図3 Conder *Flowers of Japan...*
横型三角形

したものだと推定される。独習書として編集されたこの花書には様々な流派の伝書が利用され、この図の出典については明らかではないが、生花の形として三角を提示し、説明文において「鱗」という単語を使っていることから、未生流の教え³⁹に基づいたものであると思われる。また、理論の解説ではコンダーはアレンジメントの主な構成要素（線）の呼称に哲学的な概念が使われているとし、3つの枝からなる構成の場合、複数の流派は Earth, Heaven, Mankind（地・天・人）という名称を使用していると述べた⁴⁰。そして、線の配置を説明した章ではその3つの枝を Principal, Secondary, Tertiary という英語の単語で呼んでいる。つまり、中国思想との関連性を指摘しながら、論文では基本としていた遠州流の理論を全面的に出さず、いけばなの諸流派に共通した思想的な要素をいわゆる「天地人」に見出したといえる。

もう一つ特徴的な加筆は室内における花装飾の位置についてである。上記の通り、コンダーは論文において床の間とそのなかで飾る掛物と花の関係を詳細に描いたが、*Flowers of Japan...* ではそれだけでなく、床の間以外のスペースで飾る棚（テキストでは Cabinets、Flower Horse と記載）についても解説している。そのような飾り方の挿絵を付けて論じたが、その出典は『生花早満奈飛』九編⁴¹である（図4参照）。ヨーロッパでは19世紀初頭から室内で植物を飾るためのフラワースタンドやケースなど、移動式家具が使われていた⁴²ことを考えると、コンダーがこの場合でも東西文化の類似性を発見し、それを示そうとしていたといえる。

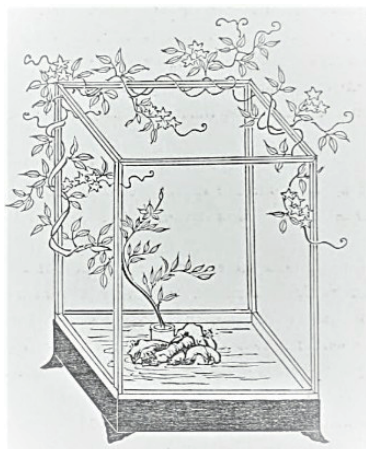


図4 *Conder Flowers of Japan...*

なお、コンダーの著書は海外向けの本格的ないけばな紹介書として画期的なものだったといえるが、1894年の段階ではイギリスにおいて普及していなかったようである⁴³。それを背景に、コンダーは1896年から1897年にかけて芸術雑誌

Studio に *Japanese Flower Arrangement* という題で3部からなる記事を連載した。その内容をみると、1回目の記事は15頁の分量で、そのうち文は5頁、写真は10頁という構成である。そして、2回目は12頁に文2頁、写真10頁で、3回目も16頁に文5頁未満、写真11頁となっている。また、それぞれのテキストはテーマ別にまとめられており、アレンジメントの構成原理、花材、そして花器などの道具を解説している。そこで立花という「スタイル」と流派の名称以外は日本語の専門用語は一切使われておらず、説明も西洋のアレンジメントとの比較を中心としているため、この連載は日本の文化に関心を持ちつつも、造詣が深くない一般読者を対象としていたことが分かる。

さらに、この記事の構成では挿絵や写真は大きな役割を果たしており、その内容は文章と同じように、あるいはそれ以上に重要であったと思われる。1893年から刊行されていた *Studio* は *An Illustrated Magazine of Fine and Applied Arts* という副題を持ち、数多くの挿絵、つまり視覚的資料を掲載する方針のもとで編集されていた。その結果、コンダーの連載記事に32枚もの写真が付いており、うち30枚はいけばな作品を写したもので、1枚が1頁に配置されたが、このような紹介の仕方は当時先駆的だったといえる。さらに、写真のいけばなは様々な流派のもので、古流8枚、池坊8枚、花本4枚、遠州流3枚、池坊霊山3枚、立花2枚、青山流と美生流はそれぞれ1枚ずつであった。すなわち、コンダーはこの記事において著書と違い、遠州流を代表的な流派とみなさず、諸流派の生花（せい か）を紹介することで、「日本的フラワーアレンジメント」の多様性と花様式の共通性を提示したといえる。

最後に、立花など、コンダーが「古風なスタイル」と捉えていた様式に関する記述の展開をみておきたい。上記の通り、論文では *shin no hana* と *rikkwa* をいけばな発展上で初期のスタイルと位置付けた。一方、著作では「歴史と理論」の章で *shin no hana* という用語だけを使い、*rikkwa* に関する記述では日本語を記載していないが、挿絵のキャプションに載せている。当時の「より洗練された」アレンジメントに比べ、この古い様式では使用される花材が多く、構図は対称的なもので、西洋のブーケを思わせると解説し、立花の評価という点で論文と同様の見解を示した。ただし、本の序文では紹介する様式と異なる現代的なアレンジで、

真の花と立花を「修正した」スタイルとして Ikenobo (池坊) に言及している。生花様式を「日本的フラワーアレンジメント」と認識していたコンダーは論文では諸流派の共通した構成原理を描こうとしたが、*Flowers of Japan...* を執筆した段階では流派の差異にも目を向け始めたことが窺われる。その傾向は上述した通り、*Studio* の記事にもみられる。さらに、1899 年刊行の *Floral Art of Japan* をみると、その段階で追加された補遺には *Description of the Rikka style of Flower Arrangement* と *Reference to the Ikenobo style* の解説があり、池坊生花の挿絵も掲載された。立花の構成に関する説明は簡潔で詳細だが、この様式は従来通りに、*a primitive method of arranging flowers* と評された。コンダーの、あくまで「モダン」、いけばなでいえば生花様式へのこだわりをここで改めて確認できる。

一方では、「池坊スタイル」の叙述に次の記載がみられる。

The Ikenobo style of flower arrangement has of late years become somewhat popular among amateurs in Japan....The most striking characteristic of this method is the close and bunchy nature of the designs as compared to those of the Enshiu and other schools....In effect, the arrangements of the Ikenobo style appeal to the European taste as more natural and less conventional than those of the Enshiu style.⁴⁴

この記述が示すように、コンダーが池坊の生花について述べた背景には、上記の明治 20 年代以降の伝統文化の見直しと流行、そしてそれに伴ういけばな界の活発な動向（池坊の東京事務所開設など）があったと思われる。一方、コンダーがいけばな理論の拠り所とした遠州流の生花は技巧的な曲線が目立ち、欧米の外国人に不自然なアレンジメントとして見られたことも事実であった⁴⁵。これを受けて、コンダーは池坊の生花と他流派のものとの差異（線の曲がり小さく、空間が狭い構成）や類似を示しつつ、より自然な様式のほうがヨーロッパ的な審美眼に合致すると結論付けたと思われる。

なお、小林が指摘した⁴⁶通り、コンダーのいけばな理論は立花様式に関する説明が追加されたことで完成度が高まった。そこで描写された「日本的フラワーアレンジメント」は事実上生花様式を意味していたが、立花様式の構造と技術も

包括的に紹介されたことで、当時のいけばなのあり方を反映した、全体的なイメージが描かれたからである。

5. むすび

本稿では Josiah Conder が提唱した「日本的フラワーアレンジメント」理論を分析の対象として、その構造と特徴、そして展開を検討してきた。結果として、以下の点が解明されたといえる。

まず、コンダーはいけばなの線の美を「発見」と評価されてきたが、それは造形における線の役割を重視した当時のデザイン理論を適用することで可能となった。さらに、いけばなの線的な構造は二次元的なものではなく、三次元、つまり立体となっていることに気づいた。当時の建築や装飾美術の理論に詳しい建築家コンダーならではの「発見」である。また、コンダー理論を全体としてみると、重点は必ずしもアレンジメントの構図やデザインではなく、花暦に表象された季節感や花材の組み合わせ、つまり自然と文化との関係や、アレンジメントにおける花器の役割、そして社会的な関係を築く上でのいけばなの意義に置かれていたといえる。

さらに、論文と著作との構造的な差異などを見ると、コンダーはいけばなをめぐる日本国内外の状況および情報を考慮に入れながら、著作の読者層を意識して、その理論を構築したことがわかる。特に *Flowers of Japan...* では欧米で一般的に共有されていた「日本文化」のイメージに依拠しつつも、それに新しい要素としていけばなの「日本的な」特徴と西洋のデザイン原理と共通した要素を紹介し、「日本的フラワーアレンジメント」に対する理解を促したといえる。コンダーがこのような手法によって「発見」し、構築したいけばなのイメージは広く普及し、その反響は後世のいけばな紹介にも、また西洋のフラワーアレンジメント理論の形成にも見られる。そのようなコンダーレガシーの解明は残された課題として、稿を改めて検討していきたい。

注

- 1 Conder 姓のカタカナ表記は明治時代以降コンダー、コンドル、コンデルと使われてきた。現在は「コンドル」が一般的だが、本稿では英語発音に近く、先行研究にも見受けられる「コンダー」の表記を採用することにした。なお、資料や文献の場合は原書の表記に従う。
- 2 コンダーの日本庭園論については、ニコラ・フィヴェ「日本庭園について英・仏語で出版された三冊の主要な書物」(『比較日本学教育研究センター研究年報』第7号、2011年)、片平幸「日本の庭と欧米人の眼差し」(『国際文化論集』41号、2009年)、片平幸「庭園をめぐる『わび』『さび』『幽玄』」(鈴木貞美、岩井茂樹編『わび・さび・幽玄―「日本的なるもの」への道程』、水声社、2006年)参照。コンダーに関する主な展覧会は『鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展』、東京ステーションギャラリー1997年；『ジョサイア・コンドルが愛した日本展』、三菱一号館美術館2012年；『コンドル博士と岩崎家四代』、文京ふるさと歴史館2021年。
- 3 コンダーのいけばな理論について論述、あるいは言及している主な出版物は、春山行夫『花の文化史』(講談社、1980年)；工藤昌伸『日本いけばな文化史3 近代いけばなの確立』(同朋舎出版、1993年)；LaPenta, J., “Josiah Conder and the invention of ikebana”, Conder, J., *The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*, Tokyo: Kodansha (2004)；吉川順子「欧米諸国におけるいけ花受容の史的探究」(『いけ花文化史研究』第7号、2019年)；井上治「花」(熊倉功夫、井上治著『茶と花』、山川出版社、2022年)；小林善帆「明治初中期の子供教育といけ花、茶の湯、礼儀作法」(『日本研究』第64集、2022年)；Dutka, M., ed., *Ikebana: dzieje, myśl, percepcja*, Warszawa: Wydzał Orientalistyczny UW (2023)；小林善帆『いけ花の歴史』(吉川弘文館、2025年)がある。
- 4 前掲工藤、47-49頁。
- 5 前掲吉川、56-57頁。
- 6 前掲井上、354頁。
- 7 前掲小林 (2025年)、148-149頁。
- 8 前掲 LaPenta 参照 (頁付けなし)。
- 9 Conder, J., “The Art of Landscape Gardening in Japan”, *TASJ* vol. XIV (1886), p. 123.
- 10 前掲小林 (2022年) 参照。
- 11 河合浩蔵「コンドル先生を悼む」(『建築雑誌』406、1920年) 19頁。
- 12 コンダーの著作には文献に関する記載はないが、挿絵を基にいくつかの花書が特定されている。前掲吉川論文に詳しい。
- 13 1906年の再版については Sadler, A., *The Art of Flower Arrangement in Japan*, New York: E.P. Dutton & Co. (1933) に言及はあるが、現物の所蔵が未確認。

- 14 Conder, J., “Theory of Japanese Flower Arrangements”, *TASJ* vol. XVII (1889), p. 3.
- 15 Dresser, C., *The Art of Decorative Design*, London: Day and Son (1862); Jarves, J., *A Glimpse at the Art of Japan*, New York: Hurd and Houghton (1876).
- 16 前掲 Conder, *TASJ* vol. XVII, p. 4.
- 17 Hogarth, W., *Analysis of Beauty*, London: J. Reeves (1753).
- 18 Garbett, E.L., *Rudimentary Treatise on the Principles of Design in Architecture*, London: J. Weale (1850).
- 19 前掲 Conder, *TASJ* vol. XVII, p.10-11.
- 20 前掲 Conder, *TASJ* vol. XVII, p. 8-10.
- 21 吉尾泰雅『青山御流活花手引き種』巻一、寛政十二（1800）年。
- 22 この禁忌は 1930 年代から米国のフラワーアレンジメントのテキストに現れはじめ、戦後にも継承された。Pfahl, P.B., Kalin, E.W., *American Style Flower Arranging*, New York: Prentice-Hall (1982) 参照。
- 23 前掲 Conder, *TASJ* vol. XVII, p. 34.
- 24 吉野政治「花暦」（『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』11、2011 年）参照。
- 25 Morse, E.S., *Japanese Homes and Their Surroundings*, New York: Harper and Brothers (1885).
- 26 20 世紀初めのアメリカでは価格の安い竹製花器が輸入されており、その使用はフラワーアレンジメント関連本などで推進されていた。Weed, C.M., *The Flower Beautiful*, Boston, New York: Houghton, Mifflin and Co. (1903) 参照。
- 27 小林善帆『「花」の成立と展開』（和泉書院、2007 年）169 頁。
- 28 前掲 Conder, *TASJ* vol. XVII, p. 5.
- 29 同上、p. viii.
- 30 同上、p. 30.
- 31 同上、p. 1.
- 32 いわゆる「花の十徳」については大塚真三「古典花道の花道観 その2」（『麗澤大学紀要』43 巻、1986 年）参照。
- 33 ラスキンの思想における芸術と道徳については塚田英博「ラスキンの美学論」（上野和子他編『ヴィクトリア朝文化の諸相』、彩流社、2014 年）参照。
- 34 Conder, J., *The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement*, Tokyo: Hakubunsha (1891), p. VII.
- 35 前掲吉川、48-50 頁；飯田操『日欧文化比較と国家表象―「花の国・日本」の文明化と「ゲイシャ」イメージ』（彩流社、2025 年）。
- 36 前掲 Conder, *Flowers of Japan...*, p. 40.
- 37 同上、p. 42.
- 38 和泉屋四次郎『生花早満奈飛』二編、天保十三（1842）年。

- 39 詳細については、井上治『花道の思想』（思文閣出版、2016年）72-74頁。
- 40 いけばなにおける「三角形」と「天地人」言説についてはドットカ・マウゴジャータ「戦前期いけばな表象における『天地人』と『三角形』言説の形成」（『問谷論集』第18号、2024年）参照。
- 41 鹿之屋一禅『生花早満奈飛』九編、嘉永三（1850）年。
- 42 ジュリア・ベラル『名画に見るフラワー・アレンジメントの歴史』（八坂書房、2010年）参照。
- 43 前掲吉川論文、63頁。
- 44 Conder, J., *Floral Art of Japan*, Yokohama: Kelly and Walsh (1899), Appendix p. VIII.
- 45 Faulds, H., *Nine Years in Nipon: Sketches of Japanese Life and Manners*, London: Alexander Gardner (1885) 参照。
- 46 前掲小林（2025年）、149頁。

ドットカ マウゴジャータ（大阪大学人文学研究科研究生）

What did J. Conder “discover” in ikebana? A Study on the Theory of Japanese Flower Arrangement

DUTKA Małgorzata

The theory of Japanese flower arrangement presented to the West by Josiah Conder has been mentioned in many studies of ikebana history in Japan and abroad. Previous research generally emphasizes the significance of the “beauty of line” in ikebana as Conder’s invention. However, any comprehensive or detailed analysis of his theory has not appeared until today.

In this paper, I examine the structure and features of the main Conder’s works on ikebana: his article “The Theory of Japanese Flower Arrangements” published in the *Transactions of Asiatic Society of Japan* (1889) and his book *The Flowers of Japan and the Art of Floral Arrangement* (1891). Comparing these texts, I argue that Conder “discovered” not only the beauty of lines, but also three-dimensional structure of ikebana, Japanese floral calendar, bamboo vessels for compositions, the role of flower arrangement in the Japanese social life and some resemblances with Western culture. Furthermore, I conclude that Conder’s thought reflected his knowledge of architecture, design and Japanese art, as well as his consciousness toward Japanese culture and “Japaneseness”.